

出版稲門会

会報

◎巻頭言：人生の「相方」 梶原治樹（1頁）
 ◎寄稿：田口やよい／能登健／松本あづさ／苅部達矢（2-3頁）
 ◎イベント開催のお知らせ：田中正裕（4頁）

●発行 出版稲門会 〒110-0016 東京都台東区台東2-24-10
 (株)新星出版社 内 電話 03-3831-0743

●発行人：筑紫恒男 ●編集人：富永靖弘
 ●021号 2026年10月1日発行

題字：服部敏幸



出版稲門会の先輩や仲間の中にも「本の学校」に深く関わっておられる方が多く、い

20代の頃から関わり続け、現在は柴野京子理事長のもと、法人・本の学校で副理事長を務めさせていただいております。出版・書店業界をはじめ、図書館関係者や読書推進に携わる方々まで、「本の出会いを創り、育てる」皆さまとともに、学びと交流の場を作る活動を日々展開しています。

新卒で入社して28年間勤めた扶桑社を離れ、2026年よりNHK出版に移籍いたしました。「8チャンネルから1チャンネル」への転身となり、50代にして新人同様、日々新しい仕事を覚えるのに必死な毎日を送っております。本業の傍らで長く続けているのが、今井書店・永井伸和さんが始められた「本の学校」の活動です。

方」であった町田毅郎君（平9法）との思い出を書き遺させていただきます。



人生の「相方」

梶原治樹

私と彼は埼玉県立浦和高校の同級生で、ともに落語研究部に所属していました。その後、揃って早稲田大学へ進学し、今度は寄席芸芸

つも心強い限りです。今後とも何かとお世話になることが多いと思います。ぜひお見知りおきいただければ幸いです。さて、本来はここで本の学校の活動やイベントの宣伝をもっとさせていただくべきところなのですが、今回は少し紙幅をいただき、私の大学時代の同級生であり、大切な「相

研究会に入会。「おどろきまき」というコンビを結成し、コントや漫才のネタを作り、小さなライブハウスなどで披露する生活に明け暮れておりました（おかげで、早稲田で学問にいそしんだ記憶は恐ろしいほど薄いのですが……）。早稲田祭のお笑いコンテストで優勝するなどし、プロの

道へお誘いの声がかかることもありました。しかし当の私たちは「大喜利やリアクション芸が根本的に苦手」という冷静な自己分析のもと、芸人への道は放棄し、ともに大好きな出版の世界を目指すことになりました。町田君は一度、都市銀行に就職したものの出版への夢を

あきらめきれず、ほどなくして白泉社に中途入社を果たしました。以来、一貫して経理畑で会社を支え、家庭では二人の子どもに恵まれ、順風満帆な人生を歩んでいました。ところが、その町田君が昨年（2025年）10月、大動脈解離により突然帰らぬ人となってしまうました。50歳というあまりにも早すぎる旅立ちでした。「早すぎんだろー！」という私のツツコミも虚しく空を切るばかり。一年が経過した今なお、どこかで「おいおい、ネタだつて」とひよっこり戻ってくるのではないかという思いが消えません。私にとって、人生で「相方」と呼べる存在は、自分の妻と町田君の二人だけです。叶うことなら、出版稲門会の集まりに二人で顔を出し、酒でも飲みながら一席ネタを披露したかったところですが、それはもう少し先のお預けとなりました。彼には向こうの世界でゆつくりと「出版業界あるある」の新ネタでも考えておいてもらおうと思っています。

（NHK出版セールス・プロモーション部 専任部長・平の政徳）

一体感のある街



田口やよい

「絶対に早稲田に入りたい」

そう思ったのは、オープンキャンパスで大隈講堂に一目惚れし、賑わう早稲田の街の空気を肌で感じたときでした。

学部時代を振り返ると、覚えているのは本のことばかりです。暇さえあれば覗いたあゆみ

ブックスさん、芳林堂書店さん。図書館のお気に入りの席。先輩に薦められた純文学、文学の授業で初めて読んだ村上春樹、友人に借りて大好きになった吉田

秋生『BANANA FISH』（バナナフィッシュ）。学友たちから影響を受けながら人生で一番本を読み、書店で卒業までアルバイトをしたあの日々が、いまの自分の原点です。

日本一かつこい建物だと言う大隈講堂だけでなく、私が早稲田大学に惹かれたのは、早稲田の街が愛と活気に満ちていたからでした。

大学への誇りに満ちた学生たちと、大学を街のシンボルとし

て一緒に盛り上げてくださる飲食店・小売店の方々……。街が一つになっっている感覚が大好きでした。

街の一体感といえば、2026年3月、三省堂書店神田神保町本店のリニューアルオープンでも感じたことでした。「地域の文化発展の拠点」を掲げた新本店を、お客様だけでなく神田神保町を支える地域の方々が祝福してくださる姿には胸を打たれました。

神保町は本を愛する人々が集う街。その一丁目一番地に本店があることは、私が三省堂書店を好きな理由のひとつです。出版不況と言われるこの時代を、

神保町の方々とどう乗り越えていくか。その力になれる会社であり続けてほしいと願い、自分もその一助となるよう努めています。

生まれ変わった本店は、旧本店を知る人には斬新な作りです。様々な意図や思いがあり、いまの形になっています。生き残るためには大きな挑戦が必要だと、本店だけでなく支店の店長である自分も、危機感と高揚感をもって日々店の在り方を考えています。これから変化していく有楽町店にも、ぜひ足をお運びください。

（三省堂書店有楽町店店長・平20 芸）

本と人をつなぐ

仕事の、その先へ



能登 健

1988年に第二文学部に入學しました。入学して間もない頃の授業で、ある先生が「早稲田に入って4年で卒業する奴は、大した者にならない」と言われまして。大学に入ったばかりの私は、当然ながら4年で卒業するつもりでしたから、これは

かなりの驚きでした。しかし今振り返ると、その言葉には、大学で過ごす時間を単なる「卒業までの4年間」と考えるのではなく、寄り道や回り道も含めて、自分の世界を広げることの大切さが込められていたのかもしれない。先生の言に倣ったわけではありませんが、6年在籍していたにも関わらず、大した者になっけない自分にも驚いています。

第二文学部は、多様な価値観や学問に触れられる自由な学びの場でした。当時はバブル経済の終焉と、社会の大きな転換期にありましたが、学生時代に培った二つの答えにとらわれず、

多面的に物事を考える姿勢」は、現在まで私の大切な財産となっています。

卒業後は出版社に勤務してきましたが、振り返れば、この30年余りで出版業界を取り巻く環境は劇的に変化しました。紙の出版市場が縮小する一方、電子出版は着実に成長し、読者の読書スタイルも大きく変わりました。また、書店数の減少や流通構造の変化は業界全体の課題となっっています。

一方で、コミックを中心とした電子市場の拡大や、日本発IPの海外展開など、新たな可能性も広がっています。出版は「本を作る産業」から、「知的コン

テンツを多様な形で届ける産業」へと進化しつつあることを実感しています。

早稲田大学には「学問の独立」という精神があります。その精神は、既成概念に縛られず、新しい価値を創造する出版の仕事とも深く通じています。

出版業界を取り巻く環境は決して平坦ではありませんが、本には人と人、世代と世代をつなぐ力があります。その力を信じ、これからも時代の変化を前向きに受け止めながら、一冊一冊を丁寧に世に送り出していきたいと思っています。

（みずす書房社長・平6 文芸）

早稲田境界

▼文科省が学部再編支援基金を27年度予算の概算要求で1100億円積み増す方針出す。理系転換を推進するのが目的だ。母校のほか10大学が使用意向を示す。その分、文系学部の定員を減らすことが条件。2040年には担う理系人材が124万人不足するとされる。減らされる文系学部への進学を希望する者はどう思うだろうか。

▼名物TV番組『徹子の部屋』で「来年はどんな年になるかしら」と黒柳徹子から聞かれた鬼才・タモリ（市昭43文・除）は「新しい戦前になるんじゃないですかね」と応えた。2022年暮れのことだ。ロシアのウクライナ侵攻勃発、国内でも敵基地攻撃能力確保が論議される状況下の発言は大いに反響を呼ぶ。

▼あれから4年、どうなったか。国際法無視で力による支配を企む大国が跋扈して世界は混沌のぬかるみ

これからが本番



松本あづさ

今年9月の創立記念日で入社30年の節目を迎える。私は早稲田からさほど遠くない会社で30年勤務している。今も昨日のことのように思い出すのが、就職活動中、現在の会社に通って

た日々のことである。

その日の就職試験が終わると、会社から大学まで歩いて帰る時間は頭を冷やすのにもってこいで、面接での緊張をほぐしたり、受け答えを反省したりする貴重なものだった。しばらく歩いて大学の雰囲気を感じられると、戻るべき場所に來た気がして自然と心が安らいだ。大学の生活に、すっかりどっぷりハマっていたのだろう。

キャンパス内で同じ学部の友人と話していたら彼女も同じ会社を受けていることが分かり、春にめでたく二人同期入社とな

ったことも忘れ難い思い出。

どっぷりハマっていたせいか、ここ数年、卒業してからずっと「無沙汰していた先輩や友人から声がかかる機会が増えた。聞けば皆、日本全国世界各地で今も精力的に活動している。これからさらにひと旗揚げてやろうという人もいる。まだまだ昔を懐かしんでいる暇はなさそうだが、それは幸運にも私がずっと早稲田を身近に感じられる場所でも過しているからかも知れない。

さて私はと言えば、30年前早稲田に励まされながら無事就職

活動を乗り切り、国内出版物販売額過去最高の年にトーハンに入社。今はその一員として過去最大の正念場を迎えている。生活スタイルの変化による読書離れ、書店の閉店増加、物流コストの増加など立ち向かうべき課題は多く、大きい。まだまだ過去を懐かしむ余裕はない。

本を愛する全国の人に将来にわたり多様な本を届けるべく、業界全体の発展のためにためまらず努力し、眼前の危機を乗り越えたい。

(トーハン特販第二部第1グループ
マネジャー・平〇一文)

タイプ、コスパを超越する魅力



荻部達矢

「やつとこれで彼らも男になれました。要は苦しさ乗り越えるのが男です」

1995年12月3日の早明戦。圧倒的な明大有利の下馬評を覆して大逆転したワセダの指揮官・木本建治は試合後にそう答えた。サッカー部を引退して受験直前の自分は衝撃と感動を覚え、人間科学部スポーツ学科

で理論を学び、ベースボール・マガジン社の憧れの編集長・伊東武彦の元で編集記者として活躍することを改めて決意した。

しかし、そこからが苦難の連続だった。末期癌の母親の看病をしながら宅浪したが合格できず、二浪目は母親の生命保険で上京して予備校に。もちろん予備校の授業をさぼって早慶サッカーを国立競技場に観に行ったり、大隈講堂にフランスW杯直後の岡田武史氏が講演に來ると聞き、「早稲田スポーツの記者です」とハッターをかまして溢れ返る会場の記者席で講演を聞いたりもした。

だが、本番は合格点に1点足りなかった。三浪目はバイトをしながら図書館で勉強。しかし、

今度は2点差に泣き、合格した第一文学部に進んだ。一文では「どうせならスポーツとは違うことを」と演劇映像専修に。フイクションとノンフィクションの違いの中に「人の生き様」という共通点を見つけた。

満を持してベースボール・マガジン社を目指したが、浪人している間に日韓W杯が終わわり、「サッカー編集部は縮小するか」と社長面接で不採用。必須授業を1単位だけ落とし「就職浪人」するも1年後もダメ。

そんなとき、草サッカーで徳間の先輩が声をかけてくれた。「ウチにはサッカー誌もスポーツ誌もないけど業界に入るのも大事。本当に作りたければ君が入って作ればいい。今、正社員

募集しているよ」

締め切りは翌日だった。履歴書を送り、2カ月後に内定をもたらした。配属先は「週刊アサヒ芸能」編集部。特集班の記者を10年、殺人事件取材や張り込みも得意となったころ、書籍編集部に異動。現在はスポーツ関連書籍を中心に編集している。

昨年刊行の『早稲田サッカー百年の挑戦』は憧れの伊東武彦氏と3年間に渡って取材。本年度のサッカー本大賞読者賞と特別賞を受賞した。同じく昨年に刊行した花田勝彦著『学んで伝えるランナー』として指導者として僕が大切にしてきたメソッドも、版を重ねている。

遠回りしてもその価値がある。(徳間書店ブックプロデューサー・平16文)

に。斯くして戦争の悲劇は止まない。国内でも拳振る女性首相が誕生して、国旗損壊罪に皇室典範改正、防衛費増強と明治期復古のような右傾路線で突き進む。嗚呼、これ如何に……。

▼元外相の岩屋毅(昭56政経)は「右に倣えの党では国を誤る」と国旗損壊罪で採決を棄権。岩屋は超党派「石橋湛山(明40文)研究会」共同代表の一人でもある。

また、今年逝去した河野洋平(昭34政経)が永く務めた日本国際貿易促進協会会長を引き継ぐ。岩屋は中国とのパイプを維持できるか。

▼河野といえば駅伝だろう。競走部で鳴らした健脚で毎年のように箱根駅伝の応援に駆けつけた。現在も競走部は多士済々の選手たちで健在。年初の箱根は4位に入った。来る来年初は長距離界の寵児・工藤慎作(スポーツ科学4年)・鈴木琉胤(同2年)らの快走で優勝争いをするはずだ。正月を楽しみにしよう。

(圖師尚幸・元六耀社
はるぶ出版社長・昭43法)

イベント
開催の
お知らせ

出版業界で働く 「早稲田の仲間」の輪を 広げましょう

田中正裕



出版業界を取り巻く環境は、いま大きな転換期を迎えています。市場環境の変化に加え、物流をめぐる課題、さらには生成AIの急速な進化など、業界全体でこれからのあり方を考えていかなければならない時です。

こうした状況だからこそ、出版社、取次、書店など、会社や立場の垣根を越えて知恵を出し合い、これからの出版業界を担う仲間同士のつながりを強くしていくことが大切だと考えました。

そこで今回、出版業界で働く早稲田大学OB・OG、特に20〜40代の若手を中心とした交流の場を企画しました。当日は、まず出版業界の現状や今後の動向について皆さんで共有し、意見交換や名刺交換を行ったうえで、懇親の場を設けます。普段は接点のない業界の同世代と出合い、これからの出版業界について話をしませんか？もちろん、大学時代の思い出話に花を咲かせるのもOKです！

今回は、日販本社のおチャノバを会場に、参加費も1000円(予定)とお気軽に参加いただける設

出版業界で働く早稲田OB・OGへ。

出版の未来を、 早稲田の仲間と。

業界の今を知り、
つながり、
これからを語ろう。

- ✓ 出版業界の動向を共有
- ✓ 名刺交換・グループ交流
- ✓ 懇親会で親睦を深める



1人参加
歓迎！

日時

2027.1.29(金)

受付開始 17:30

18:00~20:00

場所

日販本社 7F
オチャノバ

JR御茶ノ水駅
聖橋口 徒歩1分

東京メトロ新御茶ノ水駅
直結



参加申し込みはこちら！ こちらのQRコードからお申し込みください。

主催：出版稲門会 幹事会
お問い合わせ：事務局（日本出版販売 田中 正裕 tanaka_m2@nippan.co.jp）

令和8年度

出版稲門会総会のご案内



参加申し込み

記

日時：令和8年11月10日(火) 17:30～
(受付 17:00～)

会場：レストラン「森の風」

<https://b361002.gorp.jp/>

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町516

早稲田大学早稲田キャンパス 26号館 15F

TEL：03-5291-5620

式次第：（第1部）総会 17:30～

（第2部）講演 17:50～

登壇者：花田勝彦氏

（早稲田大学競走部 駅伝監督）

テーマ：「駅伝の魅力と、

箱根駅伝への展望」(仮)

（第3部）懇親会 19:00～20:30

会費：9,000円（50歳未満は6,000円）

※お差し支えなければ当日、別途年会費

（5,000円、9月1日現在50歳未満は3,000

円）をお預かりいたします。

編集雑記

▼トートハン辞すとも稲門辞せず
今年6月に会社を退任しました。東京を離れ、皆様にお会いする機会は減りそうですが、改めてよろしく願います。ところで旧盆の折、地元出身高の吹奏楽部の現役・OB合同演奏会があり、しばらくぶりに参加してみました。演奏の方は、後輩の女子高生から苦笑いされましたが、楽しい時間でした。その打ち上げ会、参加者は50〜70代の男性ばかりで世代の壁を感じたのですが、演奏の場では色々話ができたのも事実で、若い子たちとの接点を増やすには、懇親よりもむしろ経験を共有しうる「場」が必要だと思います。

した。出版稲門会でも、次世代を対象とした新たな試みが始まりそうですが、そうした「場」に育つてくれば、と期待せずにおれません。

（小野晴輝・昭62一マ文）

▼某ミステリー作家から「ちよつと相談とお願いが…」という連絡が。聞けば、中堅作家は書店員のグラ読みと推薦に支えられているのだが、書店や書店員には対価がほとんどない現状を憂い、それをマネタイズするビジネスモデルを立ち上げる、という。実用書系の当社になぜ？と思ったが、スポンサーもついているようである。年々立ち上がるそうだが、書店と書店員の価値を高める一つの手段となるように期待し、協力をしている。

（富永靖弘・昭59商）